

指揮者が語る御堂演奏会

お寺の法要に参拝して、声明や雅楽の響きに心ひかれたり、讃歌の美しい世界観に感動を覚えたという経験はありませんか。仏徳讃嘆の表現と音楽の融合は私たちをさらに深い信仰へと誘うのかもしれない。仏教音楽、讃歌の魅力について、本山の御堂演奏会で指揮を務める田末勝志さんに書いてもらいました。

感動的な演奏会

今年も立教開宗記念法要（春の法要）に合わせて4月13、14日、阿弥陀堂で「御堂演奏会」が開催されました。11月に開かれる「秋の法要」の御堂演奏会と共に、数百人もの合唱団の皆さんが一堂に会し御堂で仏教讃歌を歌う、とても感動的な演奏会です。

個人やお寺の合唱団などで練習を重ねてこられた方々が、本願寺出版社から毎年発行される演奏会の楽譜を手にも、仏さまを讃える合唱を楽しみにして集まってきました。

懐かしい響き

めでたき緊張した様子の方、上手に歌えるかと不安な表情の方などさまざまですが、声を出して仏教讃歌を奏で始めると表情が一つの方向にそろってきます。それは仏さまを讃える、感謝する気持ちを皆さんが持つておられるからなのでしょう。仏教讃歌は皆さんの心の中の篤い思いを一つにまとめる力を持っているのかもしれない。

ところでわが国の仏教音楽、讃歌の歴史をたずねてみますと、その源流は飛鳥時代に遡ることが出来ます。聖徳太子が発した「三宝を供養するには諸々の蕃樂を用いよ」の布令をうけ



仏教音楽の魅力を探る

たすえ かつし
田末 勝志

宗門校の相愛大学（大阪市）非常勤講師。合唱指揮者として多くの合唱団と共演。



て、中国の伎楽や唐楽が寺院式楽として重用され、和讃や声明を主体として発展してきたようです。蕃は「外国」という意味です。

やがて明治期に入り、西洋音楽を導入した歌による布教伝道が開始されます。唱歌に始まり、讃歌、カンタータ（交声曲）にまで展開されていきました。最近ではオペラもあります。特に讃歌は山田耕筰、古賀政男、中田喜直など、たくさん作曲家によって盛んに作られ、現在も新しい仏教讃歌が作られています。

私は一般的な音楽家、合唱指揮者として御堂演奏会や音楽法要に携わっていますが、初めて仏教讃歌を歌った時、その美しさは刺激的でした。物心ついた頃からベートーベンやシューベルトなどのクラシックをはじめ、幅広いジャンルの音楽に触れてきましたが、仏教讃歌の旋律はもろろん、歌詞にとても感動したことを覚えておきます。

例えば、「咲き匂う花のごとくにみ仏は笑まひ立たせり」（咲き匂う）、「みほとけのめぐみをうけて ころにみちる ありがとつ」（ありがとつ）、「金樹銀樹 瑠璃樹 美しくゆれて 願いとどくときは蓮の花が咲く」（ひかりあふれて）など、初めて口ずさむ言葉ですが、不思議と昔から心の中にあつたような懐かしい、そして安らぎを与えてくれるものばかりでした。

旋律に心込めて

それからもう何年にもなりますが、最初に感じた思いは今も変わらず心に響いてきます。指揮者として皆さんの前に立つ時は、その気持ちを素直に旋律に乗せてお伝えしようと思いがけています。心の中で思っているだけでなく、口に出して言うてみることはさらに思いを深めることにつながるのかもしれない。仏教讃歌はそんな機会を作ることだと思えます。

また合唱の素晴らしさは、そこに誰もがいつでも参加できるという点にあると思います。技量の有る無しに関係なく、同じ気持ちで声を出して思いを表現する。最高の音楽だと思えます。

御堂演奏会と並んで、5月21日の降誕会で高校生の讃歌衆と共におとめする音楽法要「宗祖降誕奉讃法要」も感動的です。法要ですらから私自身が背筋を伸ばし、仏さま、親鸞さまと向き合う機会でもあります。

仏さまを讃える

讃歌衆は国内に26校ある宗門の高校の生徒たちです。前日から何度も練習を重ねますが、みんな声を出していくにつれて表情が変わってきます。特に難しい「重誓偈」は練習の経過と共に力強さを増し、はっきりと仏さまのご本願が聞こえてくるようになります。そして、いよいよ御影堂での本番を迎えますが、練習時よりも表情が生き生きとくるのがはっきりとわかります。

御堂演奏会の合唱団と同じく、生徒たちのこうした成長や変化は、心の内にある思いを素直に表現できる仏教音楽と、仏さまのおられる御堂という場所のおかげかもしれません。

敵しい寒さが緩み春がやってくる。草木は美しい花を咲かせます。鳥たちもきれいな鳴き声で自らを表現します。同じように人間は気持ちや表情や言葉で表します。そして、言葉や旋律という表情で表現するのが歌です。

仏教讃歌は誰もが、一人でも仲間とでも心の中の思いを素直に旋律に乗せ、思いをさらに深めることができる音楽です。その素晴らしい仏教讃歌を皆さんにも口ずさんでいただければ、うれしいです。



宗祖降誕奉讃法要をつとめる宗門校の高校生＝昨年の降誕会

